The Society for Research in Kunten Language

副詞「けだし」の語源について

吉田金彦

ケダシ（蓋）という副詞がある。推量や万一なことを仮定する意で古代から現代に至るまで使われている。平安時代からは漢文訓読語として用いられ、今日はその流れをうけて堅い調子の文章語としての中に強調的に出てくるのは衆知の通りであるが、このケダシの語源がはっきりしていない。

語源辞書としても代表的な『大言海』を見ると、

「気慥ノ義、慥気ノ意ナラムト云フ、慥ノ条ヲ見ヨ」

とあり、タシ（慥）の条を見ると、

「正シノ略ト云フ。たしニ気ヲ冠ラシテけだしトナリ気ノ気ヲ添ヘテたしかトナル」

とある。これだとすると気が確かである、気がしっかり正しい意となって、普通いわれているような「多分・もし」などの推量や仮定の意とはぴったり来ない。語源的説明は意味構造と連なって矛盾することなく記述せられなければならないと思われるのであるが、この場合どうもしっくりしないようである。慥シ（カ）が『大言海』にいうような正シの略ではなく、指示語シ（カ）〈然〉に接頭辞タの付いたものであることが明瞭であるので、そうだとするとそのようなタシ・タシカをケダシの要素に入れることは意味的に合致せず不適当といわざるをえない。

次に、ケダシはいつも濁音であって、これが清音に読まれた確証はない。『名義抄』でも濁音で平上平のアクセントである。タシカは平上平である。タシの部分はアクセントが相違している。

このようにケダシの意味とダが濁音である理由とがうまく説明されていない点に気慥説の難点がある。『日本国語大辞典』の語源説には右の説も含めて六説が上っている。それを羅列すると次の通りである。

（1）　ケタシ（気慥）の義

（2）　ケタシ（異慥）の義、ケ（異）はあやしいの

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

意

（3）発語の言葉であり、息を初めて出すところから、イキダシ（気出）の義

（4）ケはトキのトを略し、キをケに通わせたもの、タはチカの約、ときちかくかりそめなる意

（5）ケダシ（笥出）の義、笥の中にあるものはわからないところから、疑う意となったもの

（6）キザシ（兆）の転呼か

これらの諸説はすべてその根拠が明らかでなく真の語源と見なすに足るものは一つもない。反論は省略して、筆者の考えを述べよう。

私は結論的にいって気・甚シではないかと思う。ケダシ（蓋）は気・甚シが語源であることを提唱する。以下にその提案理由を説明しよう。

第一に、ケダシのケが気でいいことは『大言海』やそれに先立つ『俗語解』の推定通りでよいであろう。『万葉』の仮名書きにも気とあるし、気ならば乙類で仮名遣の上からも都合がよい。第二に気は上代からよく使われた語で複合語の上にも下にも用いられた。気・甚シならば気がその前項に用いられた例であるが、気・甚シのように（気・形容詞）の例がこの外に少くないのである。例えば平安時代の例でいうと、

気・疎シ　気・恐シ　気・高シ　気・近シ
気・遠シ　気・懐シ　気・憎シ

などがあり、ことに気高シ・気近シ・気遠シなどは後項の形容詞の語頭が濁音化していて形の上からもケ・ダシとよく似ている。このような中古の形容詞の例を上代に溯らせて、気・甚シがあってそれがケダシとなったと見ようとするのはあまり無理がないように思える。

それはまた次のような事情とも合っている。ケダシは副詞であるが、しかし『万葉』にも「蓋雲」「気太之久毛」などとあるようにシク活用をした形容詞でもあったからである。同様な例はシマシ――シマシク（暫）、モシ――モシク（若）など副詞であり同時に形容詞にも活用する。

第三に気・甚シならば同類構造が語句として他に多く認められる。甚シは『万葉』では「痛」字を書いている。しかも「心曽痛」（万・二三〇）「吾情痛之」（万・一五一三）「安我牟祢伊多之」（万・三七六七）のように心・痛シとか胸・痛シとかのように心や胸の体言があ

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

ってその下に形容詞が来ている。そうすると気ー甚レもこれと同じ構造になるわけで、ケは後に接頭辞化するものではあるけれども、名詞ー形容詞が主述関係の構語形式を採る点において全く同様であるといえる。

第四に気ー甚レならばイタシの形容詞が上に熟合してイ音節消去例が他に見られることである。「恋痛わが背」（万・一三〇）「宇礼多伎也醜時鳥」（万・一五〇七）「事痛有とも」（万・一一四）などの恋痛レ・慨レ・言痛レなどは何れも形容詞痛レが複合した語である。イ音節は上の恋・心・言の末音に吸収されている。ウラーイタレ＞ウレタレの変化が考定されるように、ケーイタレ＞ケダシの変化が推定せられるところではないだろうか。心の場合は／ura-i／＞／ure／となり気の場合は気が一音節でしかなかったから／i／は下の夕音節を濁音化させることによって両語を繋いだのであろう。連濁は上下を繋ぐ文法機能でもあること、さきの気高レ・気近レ・気遠レの例でも明らかである。このイ音節は主述の語法機能のために消去したのではあるが、しかし音韻的には本来／ui／のような音価で、鼻音的なものであったのかもしれない。後世の語法で打消のイデとンデ、ナイデとナンダ等の関係や、敬語のゴザイスとゴザンスなどイスとンスとの関係など古今に亘って／ui／と／u／との問題がある。このような音韻史的な事情も考慮に入れておく必要があろう。

第五には気ー甚レならば意味的にぴったりくることである。形容詞イタシに苦痛の意と甚大の意との両義があった。気甚レは文字通り「気がする」「気持ちが切である」「何となく甚だしい」の意である。さきにあげた構文語法における心痛レの場合は心情が苦痛である用法であり、今ここにいう気甚レの場合は気が高じて甚だしい用法であるから、前者は情意で後者は程度に傾いている差はあるものの、本質的には同じである。「ひどく……の気がする」「何となく甚だしい」というのが原義で、そこから「多分・恐らく」というような危ぶみながら推量したり、「万一・もしかしたら」というような仮定を表わしたりするようになったのではないだろうか。このように考えるのは最も自然なことのように思われる。

ケダレ（ケダレク・ケダレクも同じ）の使われた『万葉』の歌を見ると、すでに山田孝雄氏が『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（昭10年、一五四ペ）において、

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

けだし
けだしく
けだしくも」

むかも
か
や
未然形＋ば
終止形＋とも

疑問（反語をも含む）
仮設条件

と示されているように、下は推量か疑問か仮定かに応じるものばかりである。（例を示すと、

○……かく恋ひば老い付く吾が身、気太志堪へむかも。（万19・四二二〇）

○古に恋ふらむ鳥は時鳥、蓋や鳴きし。吾が念へること。（万2・一一二）

○馬の音のとどともすれば松かげに出ててぞ見つる。若君かと。（万11・二六五三）

○わが夫子し気太之罷らば白たへの袖を振らさね。見つつ偲はむ。（万15・三七二五）

○山主は蓋有りとも、吾妹子が結ひてむ標を人解かめやも。（万3・四〇二）

の如くで、これらは「恐らくは堪えられないだろう」「きっと同じ心で鳴いたことだろう」「もしやあなただろうかと思って」「もしもお出でになるならば」「多分あるとしても」などと訳すことができるように、ケダシは下の推定・仮定表現と呼応する。ケダシは推量・仮定の陳述副詞で、語源的にはその程度の著しいことをも表わしていたことが分るのである。「恐らく・多分・万一」などケダシが確かでない推量の意を表わすようになったのは、下の述語の陳述に呼応して派生したものであると考えられる。しかしその派生的意味もすでに古くからのものであったようである。『大言海』説の気確（ケダシカ）では不適当であることが明らかであったが、気甚（ケイタ）シをケダシに置き替えてみても意味はよく通じる。上の歌のケダシを確（ケダシカ）の語に代置することはできないが気甚（ケイタ）しなら代置可能である。そんな感じがする。甚（イタ）シは恋愛や心情の表現に主用されていて、様子・気分などの形式化した名詞気（ケ）に複合することは造語法としてきわめて自然であったのである。

漢文ではもっぱら「蓋」の字をケダシと訓読し、例えば（中田祝夫氏の訓読文例による）、

○旧経の未ルルことを尋（タヅネル）に年代蓋（ケダ）シ久（ヒサ）シ。（地蔵十輪経序・元慶七年点）

○終に神変无キモノ蓋シ亦千ヲモテ計（カゾ）フ。（大唐

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

西域記巻一・長寛元年点）

のように下を断定文で結び、必ずしも推量や仮定表現が来ていない。このことについては『万葉』の方がケダレの本則に従った用法で、訓点の方は「本意如何を顧みずしてよめるが為」（山田孝雄氏、前掲書）の本来から外れた発語的用法だとしてよい。もちろん漢文の場合にも気甚し説による原義が何ら矛盾を起すものでないことはいうまでもない。

「様子がひどい……」「何となくはなはだしい」の気甚しという文構造から「恐らく・多分・万一」の蓋しという語構造への変遷は、意味的にも音韻的にも単位における統辞法的にもすべての面に亘って無理がない。かようにみられる次第であるから、私は古代語蓋シの気甚し説を提唱するものである。

語源分析はこのように音韻や意味や語法上のあらゆる条件を満足させなければならない。単に意味の上で合うとか、形態的に都合がよいとかだけでは、いかにうまく言われていてもそれは真の語源にはならず、したがってまた語彙史の体系には決してなじまないのである。私の論は以上で終りだが、なお余白があるので付けたりを書いておこう。

語源の記述もあるということで売り出した『岩波古語辞典』を見ると、ケダレは「きちんと四角である意のケダ（角）の副詞化。正しく、定めて、きっとの意」としてある。せっかくの新説だがこれはとんでもない新説である。角・シと見るのは語源的に異分析であって『大言海』などの分析法よりも大きく後退している。のみならずケダ（角・方）の所を見ると①四角、②真向い、③そば、かたわらの三義があり①には『名義抄』の觚の和訓が引かれてあるのが問題である。というのは角・方はケタであってタは濁らない。それは『名義抄』を見ればすぐ分ることで、觚の和訓もケタナルヲであってケタの部分に平上のアクセント符が付いており濁点はケの方に付いている。タには付いていないのである。「方ケタニ」（『名義抄』）は四角にの意である。ケタは柱の上に亘す水平な横木で、家や橋の建築用語であるが、桁が真直ぐで角物でなければならないところから方の漢字にもケタの訓があるのだと思われる。觚の字は角の酒杯または文字を書くための四角い木・竹札のようなもので、『名義抄』のケタナルヲはそのよ

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

うな漢文に用いられた訓読語を伝えているものと思われる。『名義抄』の和訓にはたくさん漢文訓読語が採録されているからである。

他方、角の字には『名義抄』ではケタの訓は見えない。しかし「倭訓ハラクタ」というのが引用されている。「倭訓」何々とあるところからこれは先行の辞書か音義書からの訓詁の引用であることは著しく、調べればもしかするとこのハラクタはハラケタの誤写かもしれない。もしそうだとするとハラケタはハラケタと濁って発音せられた語であったろう。桁(ケタ)は垂木(タルキ)や梁(ハリ)を支えるから建築用語としての角(ハラケタ)の存在も大いに可能性のある推測として許される。井桁(イケタ)・帆桁(ホケタ)・橋桁(ハシケタ)などのケタの複合語もあるからである。

このようにケタ(角・方)はケタの証例は存するがケダの証例は存しない。存在しないケダの例をもってケダレ(蓋)の語源を説くのは全くナンセンスではないか。あらわにものを言うのは気がひけて申し訳ないが、辞書は大勢の人が利用するものであるから、このような誤った引用はしないよう速やかに訂正して頂きたい。私は非を摘くために言うのでもなく、また私の説を主張せんがためにこのことを言っているのでもない。ハンディで多くの学生諸君にも使われる辞書であるから、少しでも誤りや疑わしい記述についてはやかましく言っておく必要と責任を感じるからである。小さなことだからといってそっぽを向いているわけにもいかないのである。

NII-Electronic Library Service